



神戸国際大学  
キリスト教センター通信  
2024年10月8日 第118号

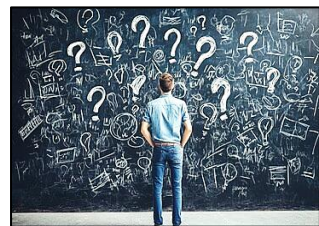
## 「ネガティブ ケイパビリティ」

キリスト教センター ミカエル 加藤俊彦

「ネガティブ」=否定的な、「ケイパビリティ」=能力、才能、強み。最近、この言葉に出会い、共感を覚えました。簡単に言うと、人生において、理解できないこと、答えが見つからないこと、どのように対応してよいかわからないことが起こった時、今まで培ってきた経験や知識や常識に当てはめて、理由や答えや対策を見出そうとするのではなく、また何とか解決しようと試みるのでもなく、事柄を動かさずにそのままにして、しばらく我慢して立ち止まって待つという能力、才能のことです。

私たちは、小さいころから、わかること、正解を出すことを求められ育ってきました。学校のほとんどの授業ではテストが行われ、問いに答えることを通して、理解度が測られ、100点を取ることが優秀という価値観の中で生きてきました。故に社会においても、問題や課題を認識した際、答えを出すことが求められ、理解し、分析し、適切な処置や方策を考え出し、解決に向けて実行することが当然のごとく課され、それが出来ないと能力がないとか、なまけていると判断されてきました。

しかし、この世の中、理解できることばかりではないし、どのようにしたら答えが見つかるのかかわからないことも沢山あります。例えば、認知症の親との向き合い方で言うと、何を言っているのかかわからず、どのように応答したらよいのかもわからず、会話のキャッチボールが減り立ちません。向き合い方の正解など誰もわかりません。他にも、子供の育て方、終末期の方との接し方、若者への対し方、新型コロナなどの新種の病気への対応の仕方なども同様だと思います。



また、一昔前から、日本の社会は、待つことをしなくなり、無意味と考えるようになってきました。24時間営業のコンビニでは、いつでも何でも買い物ができるようになり、パソコンの検索を使えば、いつでも簡単に答えを見つけることができるようになり、人との待ち合わせでは、待ちくたびれることなく、スマホで居場所を共有し合い、簡単に会うことができるようになりました。現代は、スピーディで、コンビニエンスで、効率的なことが良しとされている時代と言えます。

このような風潮の中で、ネガティブ・ケイパビリティという概念は、今まで優秀、当然、良しとされていた価値観とは真逆の視点に価値を見出しています。つまり、問題や課題に対して、安易に表層的な解決の道に進まず、早急にその場しのぎの答えを出さず、まず出来事を無条件で受け入れ、しっかりと留まり、悶々として宙ぶらりんの状態の中で、わからないままにしておくこと、疑いや不安や悩みを抱きつつ、待ち続け、耐えることに価値を認め、それを人間としての一つの能力、才能、強みと捉えています。今までの教育課程で学んできたことのない資質です。そのような、とても居心地の悪いところに居続けるためには、信じて祈ることが必要なのだと思います。時間の経過に身をゆだね、神様によって出来事が開かれ、答えが指し示され、不安や疑いのバールが解かれることを信じて、日々のルーティンを忠実に果たしつつ待つという姿勢が、このような賜物を得る上で大切なのだと思います。

ひとくちメモ 聖書には日々の暮らしについても書いてある

聖書には旧約聖書と新約聖書があり、イエスの伝道の物語は新約聖書に記されています。主の教えは聖書の全編を通じて人が守るべき行動として詳しく述べられ、モーセの十戒にある「汝殺すなかれ・むなかれ」などの戒めはよく知られています。この他にも神を崇める祭礼の手順をはじめ、仕事や契約・取引など経済、食事のほか建築に至るまでの日常生活の細かいルールや振る舞いについても記されており、教育・マスコミ・パブリシティがなかった時代において、人びとに法律を周知するための手段でもありました。毎日の暮らしの手本だったといえます。

